

【忍城】

「それで再び、人気投票を行うのですか？」

半ば呆れ気味に私はそう問い返す。

「それで小田原城様は本当に喜んで下さるのでしょうか？」

思わずそんな言葉が出てしまう。それと言うのも、小田原ファンクラブ主催で人気投票を行おうという話をされたからだ。

何故そんな話が出たのかと言えば、先の名城番付で小田原城様が上位十位以内はおろか、上位三十位の中にも入らなかったかららしい。そして今度の人気投票では、小田原城様に良い順位を取っていただく為、母数を減らし小田原ファンクラブの城娘だけで人気投票を行うのだとか。それだけでも八百長に近いのに、更には予め根回しを行ったサクラを仕込む予定もあるらしい。だけど、そんな事では小田原城様には喜んでいただけないと思い、私はつい水を差す言葉を投げかけてしまう。

「小田原城様は、そんなお膳立てされた勝利で喜ぶ様な方ではありません。それは皆さんも分かっているでしょう？」

思わず出た私のそんな言葉を契機に、人知れず企画されていた小田原ファンクラブ主催の人気投票の話は流れてしまった。

【新田金山城】

「人気投票、ですか？」

ふと漏らした呟きは、関東七名城の知己が去り際に落とした言葉を聞いてのもの。忍城と呼ばれる彼女が、愚痴る様に落としていった言葉だった。どこか残念そうに、けれどほっとした様な声色を宿して呟かれたその言葉は、その言葉とは似ても似つかぬ響きで零されたが故にいつまでも私の耳に残ったのだ。だから、また人気投票を開くのでは、なんて期待が芽吹いてしまったのだと思う。もしかた人気投票が開かれるのだとしたら、と夢想しついつい口から溢れ出る。

「うふふっ、もしかしたら私が人気投票で一番に……」

そこまで呟いた時、私の目は辺りの茂みが揺れているのに気づいてしまった。

「だ、誰か聞いていたのですか？」

思わずそう問いかける。けれど、茂みの向こうから声が返ってくることは無く不安ばかりが募っていく。暫くの間、私は茂みを見続けていたけれど、ついに我慢できずに恐る恐る茂みに歩を向けた。その瞬間、

「きゃっ」

突如、茂みから飛び出した白い影に私は尻餅をつく。そんな私の耳に遅れて、「にゃ〜」という響きが届けられた。

【彦根城】

「あら、今日も来てくれたのですね」

そう私が声を掛けたのは、このところよく訪れる様になった一匹の白猫だった。その子はそう聞く私に応える様にゃんと声をあげる。そして、ゆっくりと私の側に寄り添い語りかける様に喉を鳴らした。それだけで、私は何となくその子が何を言っているか分かってしまう。それは、猫好きが高じて得た特技と言っても良いだろう。だから、

「また、人気投票を行うなんて話が出ているのですね」

人知れず話されていた、そんな話を得てしまう。だけれど、それは所詮、気まぐれな猫の齎す噂話。人気投票を行うらしいけれど、何か揉めていたというくらいの情報しか得ることが出来なかった。けれど、

「揉めているという事はその人気投票の話が立ち消えになってしまいかもしれませんね」

と、ついそんな言葉を放ってしまうくらい心配になってしまふ状況の様だった。だからこそ、私が企画に協力すればと思ひ、知己の城娘に協力を頼むべく病床を抜け出した。

けれど、ほどなくして熱があがった私は病床に戻される事になり、暫くの間寝込むことになってしまった。

【名古屋城】

「それで、私に先の名城番付の様な人気投票をする助けになって欲しいと？」

病床で私を見る彦根城さんに、私は胡乱げにそう問いかけた。

元々、私は熱に斃された彼女が私の名を口にしたと聞いて此処に訪れたのだ。共に三名城と呼ばれ、それ故に話をする機会も多かった彼女を心配に思っていた矢先、彼女が私の名を口にしたと耳にした。だから私の事を頼ってくれたのだと嬉しく思い駆けつけたのだ。だけれど、向かった先、畳の上で横になる彼女が口にした「名城」という言葉は私を差す語では無かった。だから、私がそんな反応を返してしまうのも半ば仕方のない事なのだろう。結局、「分かりました。三大名城の名にかけて必ずやり遂げてみせます」

とそんな言葉を口にしたものの、私の心に不安が浮かぶのは避けられなかった。だって、私や彦根城さんの様な既に人気のある城娘が主導して行ったらどうしてもやっかみを受けざる事になるのだろうか。だから、

「鳴かぬなら鳴くまで待とうホトトギス。なんて言いますし、他の方がやってくれるのを待つことにしましょう」

そう呟き、他の城娘に興味を持たせる布石を打つべく動くことにした。

【盛岡城】

「昔の事を思い出してしまいますね」

そう呟いたのは、最近噂になっている人気投票の事を聞いたから。いつやるのか分からなけれど近々行われるらしい人気投票では、以前とは違った形で投票を行うのだという。だから、期待は膨らみ人気者となった姿に思いを馳せる。

「それでも昔はそこそこ人気あったんですよ」

そうして、誰にもなくそう呟きを漏らす。けれど、ふと当然の疑問を抱いた。それは、「どなたがこの人気投票の企画をされたのでしょうか？」

という疑問。その疑問に首を傾げはするも、それに答えが返るわけではない。だから、その疑問は直ぐに霧散してしまう。そして、

「まあ、そんな事はどうだって良いですわね。人気投票、楽しみですわ」

と気持ちを切り替えて、笑みを浮かべた。

彼女が、その人気投票は噂止まりで誰も企画していないと知るのは結構後の事であった。